

新潟県直江津に於ける主要工場の意義

小田 島 智 恵 子

1. テーマ

「工場が存在することが地域にとって如何なる意味を持ち、他の地域現象との密な結び付きを持っているか」という事は、その工場の規模、種類、設立の時期などは勿論、更に地域の諸条件によって異った問題を示すことになると思う。私は北陸地方の新潟県直江津を選んで上記のテーマを考察した。

2. フィールド

北陸地方は大正後年～昭和の初めにかけて、過剰電力を供給する電源地帯として、工業的に注目されて来たところであり、市制施行前の直江津を含めて、中頸城郡の工業化、特に大工場の立地に関しても、当地の水力発電、とりわけ関川水系の開路に負うところが大きい。郡内に現存する9つの主要工場のあるものはこの地方の電力会社の兼営事業から出発し、他のものはその供給電力に着目して大正9年～昭和10年にかけて成立したのである。

直江津市には、このうち4つの工場が存在するが、主なものは信越化学工業（大正15年創立、従業員数昭和32年1782～2301人、主要製品石灰窒素・カーバイド）と日本ステンレスKK（昭和9年創立、従業員数昭和33年7月1120人、主要製品特殊鋼々材）である。

3. 工場概観

信越化学工業は、日本窒素肥料KKと信濃電気KKとの *tie up* によって、日本ステンレスは中央電気KKの傍系会社として出発し、いづれも外資資本によるものである。工場用地は主に原野や畑種地によって調達されたので、農地転換が農業に与えた影響はそれほど著しくない。原材料は信越の石灰石、蛇紋岩を除いて殆ど遠隔地からの移入であり、輸入品も少なくない。実に製品の仕向地は、関東や関西を中心としており、地元を対象とした製品はみられない。工場設立時には一忒考慮された港の利用は自然的な悪条件と設備の不備から現在利用されて居らず、輸送は専ら鉄道に依存している。

現在工場とこの地域との最も密接な結合が見られるのは労働力の問題である。現在でも従業員の大部分は地元出身者であるが、工場の立地に際しては電力事情と共に低廉で豊富な肉体労働者を農村部の過剰労働力に求めようとする意図が含まれていた。特に安価だが電力供給の季節差が著しい特殊電力

に多く依存して来た信越化学では、操業の季節的変化を行う爲にも季節的に変動し得る労力の存在が大きな意味を持っていた。この工場では、現在でも季節的に数百人（昭和32年には519人）の従業員数の変化がみられる。季節工の中には農村部に足場を持つ労力も多く、雇傭期間と農繁期が重なる場合でも現金収入を得る爲に工場へ通勤するのである。

4. 農家労力の仕向から見た工場の意義

常傭工や季節工を含めて、工場労力の流出が農業とどの程に関係して行われているかを把握する爲に、工場地区に隣接する市内八千浦（旧八千浦村）を対象として、農家労力の仕向を通じて工場の意義を考察した。

八千浦では工場設立前から農業の経営規模は小さく自給的色彩が強く、兼業農家が大部分であった。農作業は主に婦女子や老人の手に任せられ、主幹労力は漁業、沖仲仕、日雇を始め、杜氏、養蚕、匠隣村の農作業への出稼などに従事していた。この様な地域にとって大工場の設立は有力な労力の仕向先を生み出し、外部に流出していた労力を徐々に固定させていった。上記の様な農業の特性からこの様な青壮年層の通勤工化は、労力の面で農業に大きな打撃を与えなかつた。しかし農家労力の仕向からみると、農業経営の相違によつて部落間に賃金労力者や農業従事者の表われ方に差がみられる。農業が自家消費を目的とする黒井部落では、通勤工を始めとする賃金労力者が圧倒的で、農業従事者は90%が女子である。経営規模のやや大きい下荒浜部落でも同様だが、こゝでは質耕作や共同作業によつて、労力の季節的不足を補っている。村内で一番農業の *weight* の高い西ヶ窪浜部落では、青壮年層の男子も農業に従事しており、男子が農業従事者の30%を占めている。

総じてこの村では、経営規模も大きくて商業的農業を行っている一部の上層農家を除いては、定期的に現金収入をもたらす雇われへの魅力は大きなものであり、信越の季節工の程に農繁期と雇傭期が重なる場合でも就労している。安定した雇傭による収入源を持つ農家は、それを第一義とし、残つた家族労力の中で可能な限り有利な経営を行おうとしている。